

令和3年度 第1回静岡市政策・施策外部評価委員会 会議録

- 1 日 時 令和4年1月17日（月） 13：30～15：00
- 2 場 所 静岡市役所静岡庁舎新館9階 特別会議室（各委員はZoomで参加）
- 3 出席者
  - 【委員】 北大路信郷委員、米原あき委員、伊藤史紀委員  
坂野真帆委員、青木真咲委員
  - 【行政】〔評価対象〕企画課長、歴史文化課長、観光・MICE推進課長 ほか  
〔事務局〕 総務課長、石川課長補佐、中条主査
- 4 傍聴者 なし
- 5 会議内容
  - (1) 評価の進め方について
  - (2) 評価
    - ・歴史都市① 400+プロジェクトの推進（歴史文化の拠点づくり）

事務局：それでは評価に入る。資料に基づき、企画課長から説明させていただきます。

《 企画課長 説明 》

事務局：それでは、各委員から3次総期間中の評価できる点、改善すべき点について、御意見をいただきたい。

伊藤委員：何をもって成果とするのが難しい。取組んでいる内容は事業があって形ができる事業もあるし、検討中の事業もある。3次総期間取り組んできて4次総に向かうこの8年間の中で得たノウハウや気づきはあるか。

企画課長：体系的な整理がない中でやってきた。指標についてどのように結果に反映されてきたのか相関関係も明らかではない。今後ロジックモデルの中でやっていきたい。

坂野委員：今回の政策は、歴史文化の拠点づくりというところが大目標だったかと思う。拠点と言うものは、建物ということ以上に機能というところが大事だと思う。目に見えるものができるということは注目が集まり関心が高まるのでとても大事な事。3次総の後半で歴史文化施設や周辺環境整備が整えられたことは大きな成果だ。ハードの整備に関しては議論もあるところかと思うが、事業を進めてきて博物館が来年の1月にはオープン

するということまでできたということは、私としては評価させていただきたい。

ただし、それぞれのところがどのように連動しているかがこの資料の中では見えない。それぞれの核づくりのためにそれぞれの事業があったかと思うが、情報共有や連動性というところは気になった。現状どのようになっているのか。

企画課長：面的にも整備していなければならない。他の構想も含めて予算措置をする上でそれぞれの五大構想に関する事業については重点的に措置をしてきた。個々の事業の結びつきはさることながら、全体の底上げをしてスピード感をもってやってきた。

坂野委員：名見える形では駿府城公園周辺が整理されてきた。3次総の一番目玉というかここに目に見えるところを作るという点においてはよかった。今後の課題として、この施設を今後どのように事業展開で活かしていくか、ということがある。観光して活かしていく、教育として活かしていくなど、誰がどのように使っていくか想定して整備したのかについては、いまひとつ見えないところもある。個人的な意見としては、観光として世界中から人が集まるという要素は大きいかと思うが、その土台としては、地元の方々がどれだけ関心をもってこの施設に価値を持つかが大事だと思う。今回事業の中には教育関係の事業も関わりがあることがあるのではないかと考えているが、博物館事業と教育現場や教育委員会事業との関わり合いといったところは現状どのようなか。

歴史文化課長：教育は当然大事な事だと認識している。博物館を作るとなると歴史の専門を持った学芸員が中心となって展示のことをやっている。どうしても学術中心となると難しい話になってしまう。しかし、静岡市の古くからの歴史を学んでいただく、特に、市内の子ども達に知っていただく。それは静岡学という学びがあるが、その中でも触れられてくる部分で徳川家康や今川、東海道などはある。そういったことについて、小さい子供からしっかり学んでいただき、静岡は昔から本当にすごいところだったと、世界と繋がっていたと、誇りに思っていていただき愛着を持っていただきたい。

やはり、学術中心の施設ではなく、底辺の幅広い方に理解いただける施設づくりをしていきたいと思っている。今現在も教育委員会の先生方とも話をして、教育現場でどのような活用ができるか、また学校現場だけではなく、離れたところでどのような活動ができるのかについては少しずつ進めている状況である。

坂野委員：静岡市は歴史資源がたくさんあって反対に分からなくなってしまう面がある。今回、歴史博物館ができて一つ徳川家康という軸を置きながら体系的に見せていただけると聞いているので大変期待している。歴史文化課長がおっしゃったように、専門的なことを平易に伝えていくことができれば、静岡の持つポテンシャルを多くの方に享受していただくことができると感じている。特に、市民が資源の価値の高さを認識することで、歴史の拠点というところが市民の拠り所になればいいなと思っている。コロナの状況下に観光でどのくらいの人に来られるのかという話があったが、観光という広い意味では、市民や近隣の方がリピートして訪れることも大事。足しげく通っていただき、愛着を持てるようなエリア、施設になっていくとよいのではないかと。どこから来る方、というより静岡

の歴史に価値を感じ何度も来てくれる方を増やすような施策が今後も続いていくとよいと思う。

北大路委員：4 関連する指標の状況の設問が、伊藤委員が言った通り駿府城を中心とするエリアにリンクするような質問ではない。なんとも分析しようがない動きをしている。4 次総において同じような評価情報が欲しいということであれば、今からでも準備をして、政策と結果とのつながりが濃くなるものを検討した方がよい。

昨年の3年に政策評価審議会が役に立つ評価をやろう、という意見をだした。職員のモラルアップに繋がるもの、やった甲斐があったなと思えるもの、自分でも満足するし国民のためにもなったという好循環が起こることが評価。国全体に出したメッセージだが、自治体にも読み込んでもらいたい。

青木委員：構想の先にあるビジョンがこの資料からはイメージできない。人によって変わってしまうのではないか。目指すビジョンが共有されていないとそれぞれのやる目的が見えなくなってしまうことがあるのでは、博物館を作るということは価値があることだからこそ、この博物館によって静岡市がどんな姿になるのか、立ち返れるような姿があると良いと感じた。指標ともリンクしてくるだろうし、静岡市全体というよりは駿府城エリアに注力するというメッセージだと思う。そういったエリアづくりを目指していくというメッセージを発してもらえると民間企業も連携もしやすい。ビジョンを持って引っ張ってもらえるとよいのでは。

市民が歴史文化を感じられるまちづくりと観光客との両面があるように感じる。外から静岡市に訪れる方にとって、駿府城というものに認知がない。駿府城公園という存在を知らなかった。駅を降り立った時に歴史文化があるまちという感じがしないのが残念。博物館を作る、石碑を置く、ボランティアガイドを育成する等の取組は必要なことだと思うが、誰にどういったことを伝わっていくことを目指すか、から逆算して取り組んでもらえるとよいのではないか。

市に提案して街歩きの音声ガイド、市の方からこういったものを作りたいという話があるといいと思った。

企画課長：大目標の中に「市民」が抜けている。今7つの柱として4次総に向けたところを作っている。市民の歴史認識の醸成や駿府城公園周辺に集まっていただくビジョン 指標の設定も自ずと変わってくると持っている。3次総で評価の難しさを感じている。努力を表す指標を設定することが大事だと感じている。今回の歴史文化の指標の案としては駿府城公園の人流データ、検索エンジンのキーワード数など直結するような指標を検討している。

青木委員：これからのまちづくりは行政だけでやっていくものではない。民間事業者の目線で言うと、ブランドづくりをやっていく中で、民間に相乗りしやすい環境を作ることが大事。経済効果のようなところで指針として 相乗りしやすい政策にする というのも視点として大事ではないか。

米原委員：指標の設定について難しかったという話を聞いた。私は統計学を専門としている。指標を立てる時にロジックモデルベースで考える。関わっている人たちが納得できる、こういったもので測ってほしいというものを設定できると良い。数字とコミュニケーション取れる指標を設定すべき。統計的な優位性を解釈してほしい。

2点お伺いしたいが、静岡市はSDGs未来として全市的に取り組んでいる印象がある。このアンケート結果が上昇しているのが仮にSDGsについて市民へ啓発があったとするならば、歴史に関しても上手に構想すると変わってくるのではないか。その辺りはどのようにお考えか。また、文化財サポーターについてはコロナ禍中でも増加しているが、どのような取組により増えたのか。

企画課長：SDGの期間は進めてやってきている。SDGの認知度が低かったのが上がってきているので、その辺りが影響したかもしれないが、

事務局：文化財サポーターの質問については通信状況がなくお答えできないので、後日回答させていただきます

米原委員：ウィズコロナの時代にどのように対応していく予定なのか。オンラインアクセスの博物館で公開する可能性はあるのか。また、教育との関連の中で民間との相乗りという話があったがその通りだと思う。横浜市の事例で、横浜の時間というものがある。民間の事業者さんと一緒になって海関係の事業をやっているが、子どもは学習者であるだけでなく発信者にもなり得る。また、神戸市では修学旅行などのイベントを企画する取組をやっている。JTBとのやり取りも生徒がやるといった教育分野と民間分野と連動した事業もある。こういった取組も博物館をベースにやっていくとなれば、来館者数だけではない指標が必要になると思う。博物館をどのように活用していくかによって、設定する指標も変わってくるのではないか。

事務局：続いて、4次総に向けた提言について、各委員から御意見をいただきたい。

伊藤委員：ビジョンというか、最終的にたどり着きたい全体像からブレイクダウンして、できるだけ相関関係、因果関係がみえるように作り、指標を設定していただきたい。現在ロジックモデル作りに取り組んでいるというところはぜひお願いしたい。市が目指す最終的な部分としては経済効果にといいところだと思うが、自治体の役割としては30年50年100年地点から考えて大事にするもの、文化を作るという側面もある。ビジョンを明確化するとともに、定量化しにくい部分も意識したものがあるとよいのではないか。

坂野委員：これまでハードが整ってきたこれをいかに使うかがこれから。使うのは行政の中で使うより市民が使うことで満足度が上がっていくということだと思う。外に目がいきがちだが、地元の人たちがどこまで使い倒せるか、自分達に関わりあるものだと思い入れを持つ人をどのように増やしていくか、そういった事業がたくさん出てくるといいのではと思っている。

また、こういった事業についてはタイミングというものもある。今後大河ドラマが来ると聞いている。例えばこういうタイミングは大きいので、時期をとらまえて発掘現場につ

いての見える化について、とても急いでいただきたい。博物館が出来たら工事に入ってしまうのは残念。本物の迫力は何物にも代えがたい大きな価値を持つので大事にしてもらいたい。民間との連携については、情報を共有することが大切。個々のことが目に見えない部分が市の事業の中にある。知らせる広報、知る機会をつくるというところに重きを置いてやっていただきたい。こういった拠点を使いながら歴史を作っているという実感を持った市民を増やしてほしい。

北大路委員：3点ある。一番は3次創の構想が分かりにくく複雑すぎる。シンプルなものにしてもらいたい。2点目として、役に立つ評価をやるためには費用対効果の高い評価に絞ってやるべき。7つの柱はしっかりやるのはよいのでは。ただし中身を見るとずいぶんある。事業評価だけでも大変。役に立つ評価になるのだろうか、今後の課題ではないか。そして3点目については、総合計画は市民とシェアするもの。市役所だけでつくっては意味がない。みんなで共有する必要がある。その方々と一緒に評価をしていくということが大事。絶え間なく持続的な改善につながる。そのためにはシンプルかつ政策集中してないといけない。できるようにしてもらいたい

青木委員：民間事業者や市民にとって分かりやすく相乗りしたくなるモデルを作ってもらいたい。8年後をどうなっていたいかなを目指す4次総を、市の職員が迷った時に立ち返る、民間事業者が市にアイデアや取組を提案できるようなビジョン示してほしい。

米原委員：やはりビジョン感が足りない。歴史というものをどうとらえるか、歴史というものへのアプローチとして、過去の史実を知ってもらうことや、それを次の世代に繋げていくということもある。4次総の歴史文化の地域づくりとは何を指すのか、明確にしておくことで、そういったことを目指すのであれば若者を巻き込む必要があるよね、といった次の一歩が見えてくるのではないか。

また、当事者に近い方々と本質的な議論ができるかが重要。市役所の役割としてプラットフォームとしての役割が求められているどれだけ現場や立場の意見が反映できるかが大事だと思う。

指標に関しては、アウトカムの変化もいろいろなレベル感がある。意識しながら立てていくのがよいのではないか。意識調査については解釈が難しい部分もあるが、この次元であれば抽象度が高くないと測れないなど、意識しながら立てると良いのではないか。

事務局：以上での歴史都市① 400+プロジェクトの推進（歴史文化の拠点づくり）の評価を終了する。